

c094-003-006

コミュニケーション

©2022 YHPL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

科学者京都会議は、沖縄についてこの理解を深めようとする
^{主要}と目的として、六月八日から三日間、東京において勉強会を
開いた。この会には継続委員会呼びかけによって大内兵征、
谷川徹三、宮沢俊義、我妻栄の各氏を小くは二十一名が
参加し、次の報告をもとにして討論が行われた。

「世界経済はいま転村である」(大内兵征)、「ドル危機と世
界経済の動向」(松井清)、「ベトナム戦争について」(田中
慎次郎)、「沖縄について」(中野好夫)、「本土にとって沖縄と
は何か」(大田昌秀)、「沖縄と本土」(永積安明)、「放射
能汚染事件は何を物語るか」(三宅泰雄)、「日米安全保障
条約及び交換公文」(田畑 昭二郎)。

中心的な課題であった沖縄^{の復帰}については、中野氏によって、戦
後沖縄が安保体制のもとで、アメリカの極東戦略の中に入ります
す深くのめり込み、ベトナム戦争の激化とともに攻占基地の特
相を示して来た事実^のを^示された。永積^の神戸大教授は、
本土と沖縄との間には歴史的に人間的連帯の不在状態が形成さ
れて来たことを述べ、それにもかかわらず言語と文化の連続が存
在するを指摘した。そしてこの事実を^{基盤として}それぞれ独自の^{発展}がある、
両者の人間的連帯は、^源根^的に恢復、強化されるであろうと結論した。
大田琉球大教授は、沖縄^の島民としての立場から、本土の人の

沖縄についての意識は現実からいりじるしくずれている事実を
具体的かつ率直に指摘し、参加者に^{深い}感銘を与えた。そして
戦後沖縄県民が、基本的人権と生活権を極度に制限され、「核」
の隣りに生きることを強制されてきた現実をめぐって活発な
討論がおこなわれた。」

今回の勉強会においては、~~わが国民~~^の沖縄において置かれて
いる植民地~~的~~状態からの解放^が、一日も早く実現^{され}ねばならぬこと、
そのためにも、沖縄を小さく日本全土^が、「核」から解放^{され}
~~ねばならぬこと~~があらためて痛感された。

一九六八年六月十日

科学者京都会議継続委員会

湯川秀樹

朝永振一郎

坂田昌一